

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 8 月 19 日現在

機関番号： 3 2 5 1 6

研究種目： 奨励研究

研究期間： 2020 ~ 2020

課題番号： 2 0 H 0 0 6 8 7

研究課題名 ハンセン病療養所内のキリスト教関係史資料及び記憶の保存と継承に関する研究

研究代表者

阿部 伊作 (Abe, Isaku)

東京基督教大学・神学部・大学図書館司書

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 420,000 円

研究成果の概要：本研究の目的は、国内国立ハンセン病療養所内に存在するキリスト教会の資料保存についての調査である。

コロナ禍での限られた範囲であったが、療養所内の各交流会館と教会へアンケートとフィールドワークを行い、資料・文献の調査と蒐集を行った。特に戦後の療養所内教会と教会員の信仰生活と活動、療養所内外の教会・大学・団体等との交流を好善社発行機関誌に基づき考察した。自治会活動への教会員の関り、長島聖書学舎（伝道者育成学校）卒業生による患者自らの患者への伝道、韓国療養所との関わり等、全体像は未だ十分に検証・評価されておらず、それら資料保存の課題を検討し、入所者高齢化の中、保存・継承することの意味を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本のハンセン病問題をどのように継承するか、その資料保存について回復者の宗教的活動からその意義を考察するものである。

「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が出来、隔離政策を示す様々な資料保存、また入所者の生活を伝える資料の保存も進んでいるが、入所者の内面を知る上での宗教活動の資料や療養所外の人々との交流の歴史等の資料保存は進んでいない。それらは人権侵害のない共生社会育成において幅広い視野をもつため重要で、啓発教育と共に差別解消・人権回復の両輪として要であること、また保存意義の理解を深化させ、資料収集と資料の整理・保存のために更なる人・設備等を充実する必要があることを示した。

研究分野： アーカイブズ学

キーワード： アーカイブズ学 ハンセン病 ハンセン病問題 資料保存 療養所内キリスト教会 隔離政策 好善社共生

1. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、国内の各ハンセン病療養所に存在するキリスト教会と関係者に関わる史資料の資料保存及びその継承について、各療養所の資料保存機関と教会また関連団体等における現状と課題を調査することである。ハンセン病の記録は、入所者の高齢化や、語り部の減少などにより、その歴史と教訓、記憶の風化が懸念されている。複雑な背景を持つ記録をどう残し、継承していくのか。アーカイブズの存在意義が問われている。そのために必要な事項を調査・検討し、今後を展望するための研究を行った。

ハンセン病治療史におけるキリス教による活動は、救らい運動の活動や信仰的な証詞は残されているが、より本質的な、当時の時代や社会に沿った検証やキリスト教史の中での位置づけは充分なされていない。この研究は、患者自身の生活の歩みについての史資料や人物のオーラルヒストリーなどの記録を、アーカイブズ学的視座から考察を行うものである。

2. 研究成果

国内にある私立療養所と療養所内の18か所の資料保存機関(国立ハンセン病資料館並びに各交流会館)療養所の27のキリスト教会へ資料保存の現状と課題について基礎的アンケートと訪問調査を行い、ハンセン病支援団体好善社資料を基に、主に戦後の歩みについて療養所内教会と教会員の活動、療養所内外の教会・大学・団体等との交流を考察した。従来の研究では周縁的な活動としてあまり扱われてこなかった教会と入所者の宗教活動、キリスト教会に焦点をあて、特に回復者キリスト者が主体的活動を行ってきた姿を明らかにすることができた。

(1) アンケートについて

まず、資料保存機関(交流会館等)を対象にアンケートを行った。対象は18機関(内訳:国立15、私立3館)回答:18館であった。設問項目は28問で、機関情報、設備、機能、中心的機能、職員数、目録、イベント、整理方法、資料保存対策、療養所内外との関係、キリスト教資料保存状況、量、課題・計画などについてであり、電話、メール等で補足確認を行った。それらの回答を通して、各資料館の設立に至るまでの経緯、自治会との関係、管理運営方針の違いはあるが、多くの施設では、人権回復のための展示や啓発活動に力点が置かれ、資料を収集・管理する収集アーカイブズの側面は充分でないことが課題と考えられた。その背景として、特に地方の交流会館では、人員不足、業務の多忙、現在取り込む重要性の優先度などの差異などが課題となっていることが分かった。

また、資料の寄贈・委託・複写・保存相談などに関連して、交流会館と療養所内の個人やサークル団体、自治会、病院、事務局、宗教団体、療養所外の団体・個人との連携・協力の現状を尋ねた。全体を通して、それらに関して、様々な理由による難しさがあることが分かった。

ハンセン病療養所の各交流会館等は、国賠訴訟以後の提言等により整備がなされ、主な業務目的が策定されているが、自治会や入所者個人が保存している資料の整理・保存を、展示啓発との両輪として療養所全体の問題として深めることの方策が必要と思われた。

教会を対象としてアンケートからは、全体的に資料保存の意識が薄く紛失や劣化などが進んでいる現状が窺われ、ハンセン病キリスト教関係資料が、教会、信徒宅、また交流会館、国立ハンセン病資料館など様々な場所に散在しているほか、資料の散逸などが進んでいることを確認した。教会に残る資料では、ほとんど資料が残っていない教会もある一方、教会資料の目録化・デジタル化、復刻等を行っている教会もあった。また、回復者信徒の個人著作、各教会が刊行した記念誌、療養所外の教会や地域資料の中にも様々な記録が残さ

れている。しかし集約・横断的な目録や、所蔵機関・教団教派の繋がりが分かる解題など、利用者が全体像を理解できる記述を含む目録の整備は課題であろう。

そうした保存・整備のために、所属教団教派や関連団体など外部からの支援が見込める教会と見込めない単立教会などがある。またそのために必要な、代行者や協力者、ボランティア等の人材や関係者間による保存意義の理解や意思疎通が必要である。総じて、入所者の高齢化や各教会代表の逝去、さらにはコロナ禍により、記録保存・整理の困難さが増している現状を捉えることができた。

(2) 外部団体「好善社」の史資料について

療養所内キリスト教会を支援してきた団体好善社の事務所には、明治期からのハンセン病医療に関わる慰廃園史料が保存されており、また戦後の療養所内の基督教会に関する史料が保存されている。それらを読み解き、戦後の療養所内教会の教勢（教会員の推移）を主要年度ごとに表にし、関連資料のリスト化などを行い、全体像を明らかにした。主要な資料については、デジタル化を行った。また、療養所内教会記録を残す意味について、アーカイブズ機関の担うべき役割・在り方を中心に人間の尊厳の本質からの考察も行った。特に、長島愛生園にあった長島聖書学舎の活動を資料から読み解き、従来、受動的慰安を受ける存在と捉えがちであった回復者キリスト者が、療養所内外において主体的に活動し、内外の教会、信徒同士の交流、自治会や人権回復運動への積極的な参加などを行っていたことを確認した。併せて国賠訴訟最終報告書の記述における、宗教者の救済活動の目的が慰安だけだったのかの点についても批判的に論じた。

(3) 聴き取り調査について

長島愛生園にあった長島聖書学舎に関係した入所者、社会復帰回復者等の関係者、また療養所外の教会関係者等に出て聞き取りを行い、関連資料を採集、デジタル化を行った。好善社発行機関誌以外に、卒業生たちが発行していた機関誌の一部を収集することが出来た。また療養所内にある礼拝堂、また教会内納骨堂を確認し、納骨堂については人権の観点からも保存の重要性を確認した。ハンセン病キリスト教を研究する際、療養所内の資料に限らず、関連する事柄について療養所外にも調査対象を広げ多角的に研究をすることの重要性が明らかになった。

(4) まとめとして

ハンセン病問題は、従来、加害者対被害者の二元論的枠組みで研究の蓄積がなされ、療養所内の多様な実情や入所者の宗教などは周辺的事柄として扱われる傾向があった。さらにキリスト教との関わりでは、救済的活動の研究が優先され、療養所内の教会や信徒が何を考え、どのように教会生活を送ってきたかは十分に記録されていない。キリスト教がハンセン病隔離政策に協力、補完する活動をしてきたことは否定できないが、信徒の中には、自らが自治会活動等を通して自らの生を生きてきた人たちなど様々な生き方があった。ハンセン病アーカイブズの整備は、そうした従来の研究の枠組みにとらわれず、人権や地域・社会との関わりなど、多角的な研究を行うための基盤を提供することを考察することができた。以上のような史資料の保存と継承は、回復者たちの生を捉え直すことが可能となるほか、入所者と支援団体との関係性は、コロナ後の社会における病との共生や差別等の問題にも新たな視野を提供できると思われる。

アンケート結果、療養所内教会長島聖書学舎に関わる人々の活動、負のアーカイブズとしての療養所資料等については、研究会報告、学会発表、大学紀要への寄稿を行った。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1．著者名 阿部 伊作	4．巻 32
2．論文標題 〔研究ノート〕 好善社資料を中心とした国内ハンセン病療養所内キリスト教会と長島聖書学舎についての一考察	5．発行年 2022年
3．雑誌名 キリストと世界：東京基督教大学紀要 = Christ and the World	6．最初と最後の頁 105～149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34581/00002521	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 阿部伊作
2．発表標題 ハンセン病療養所内のキリスト教資料の考察
3．学会等名 日本アーカイブズ学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 阿部伊作
2．発表標題 負のアーカイブズとは？ハンセン病療養所で少々、生き方を学んで
3．学会等名 アーカイブズサロン
4．発表年 2022年

1．発表者名 阿部伊作
2．発表標題 長島聖書学舎について
3．学会等名 教会アーカイブズ研究会
4．発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------